

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

上級日本語クラスにおける地域連携プロジェクト「 ヒラカタからヒラク」実践報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学留学生別科 公開日: 2025-04-11 キーワード (Ja): 日本語教育, 地域, 共生社会, Project-based Learning キーワード (En): 作成者: 倉沢, 郁子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000345

上級日本語クラスにおける地域連携プロジェクト 「ヒラカタからヒラク」実践報告

倉沢 郁子

要旨

本稿は、関西外国語大学（以下、本学）の日本語科目日本語 7（上級前半コース）で実施している地域連携プロジェクト「ヒラカタからヒラク」の活動実践報告である。2023 年秋学期の中上級レベルの改訂を機に、教材で読解や文法練習を進める学習と、PBL（Project-based Learning）の二つの軸を往還しながらすすめていく内容へと変更した。本稿では 2023 年度秋学期から 2024 年度秋学期の 3 度の本プロジェクトの実施について、学期末アンケートと学習者の振り返りエッセイをもとに考察を加えた。アンケートは 65 名の履修者のうち 41 名（63%）から回答があり、学生の自己評価では、スピーキングとリスニングで回答数の半数が言語能力の上達を感じていた。また、プロジェクト実施前後を比べて、より日本語能力に自信がついたという報告がなされた。

【キーワード】 日本語教育、地域、共生社会、Project-based Learning

1. はじめに：日本語 7 の二つの軸

本稿は、本学の日本語プログラムで必修科目として開講されている日本語 7（上級前半コース）で実施している地域連携プロジェクト「ヒラカタからヒラク」の活動実践報告である。本学の総合日本語のクラスは初級から上級まで 8 レベルあり、他にも選択科目として Kanji & Readings やビジネス日本語のコースなどがある。総合日本語のレベル 1 から 4 までは、『初級日本語 げんき』（坂野ほか 2020）シリーズを、中上級レベルは教員が作成したオリジナル教材を使用していたが、中上級レベルは教授法、評価法もそれぞれだったため、国際交流基金が「ヨーロッパ共通参照枠 Common European Framework of Reference for Languages」（以下、CEFR）をもとに作成

した JF 日本語教育スタンダード (2023) (以下、JFS)、そして日本語能力試験 (以下、JLPT) の該当レベルを参考に 2023 年度秋学期開始時から統一シラバスを作成し、レベル間でのアーティキュレーションをスムーズにする取り組みを図った。

このシラバス改定についての詳しい報告は高屋敷ら (2025) に詳しいが、筆者は改訂にあたり日本語 7 (上級レベル・前半) の担当となり、改訂前の教材、市販の上級日本語教科書、そして JFS で提示されている 15 のトピックを参考に教材の準備にとりかかった。当該レベルは、習熟度は CEFR の B2.1 を、文法は JLPT の N2 レベル相当の表現を学ぶことが目標とされている。そのため、アカデミックな話題や時事問題、社会問題について、自分の意見や考えを根拠や理由とともに述べられること、また適切な表現を用いてコミュニケーションする能力を身につけるコースが期待される。

また日本語 7 は、従来の教室内の学びに加え、PBL (Project-Based Learning 以下、PBL) を取り入れ、二つの軸を往還しながら学びを深めていくイメージでコースをデザインしたいと考えていた。本学の留学生の多くは提携校から来ている短期留学生で、学外コミュニティと接触を持つことが難しいと聞くとある。積極的に学外に出ていこうとしなければ、同じ留学プログラムに所属する同年代の留学生や学内の教職員とのやりとりだけで終わってしまうケースも少なくない。しかし、上級日本語学習者にとって、様々な日本語に触れることが大事なのではないかと考えた。本来人間は、多様な年齢層や文化的背景、人生経験を持つ人々が周りにいる中で生活をしている。発達心理学では 13 歳～22 歳は「青年期」と言われ、大学生はアイデンティティの確立が発達課題にある時期でもある。就職活動や大学院進学なども含め、今後の人生をどのように過ごしていきたいかを考える時、さまざまな価値観に触れ、自分は何ができるのか、どのように社会と繋がっていきたいのかを考え、自分とはどういう人間なのかという自己アイデンティティを考えるきっかけとなるコースを作りたいという希望もあった。

以上のことを鑑み、PBL の軸となる「ヒラカタからヒラク」と、以下の 5 つのユニットを準備した。

Unit 1 : 自分のこと、何と呼ぶ?⁽¹⁾

Unit 2 : 枚方市の魅力発信「マイカタちゃいます、ひらかたです！」

Unit 3 : 推し活！

Unit 4：リサイクル？アップサイクル？

Unit 5：成熟した社会とは

2. 地域コミュニティにおける学習

2.1 地域での PBL 実践例とその意義

日本語教育において、多文化理解や共生社会を考えるための学習実践は増えている。土井（2021）は Project-based Learning と Problem-based Learning の類似点と相違点を概観した上で PBL を「学習者が主体となって能動的に学ぶ学習法であり、実世界の問題解決に向けて協働学習を行うもの」としている。大学で行われている実践例としては、留学生と日本人学生が共に多文化共生社会を考えるプロジェクトを産学連携で行っている「につぼん多文化共生発信プロジェクト」（三代ほか 2021）や、所属大学や市を調査した上で見えてきた問題に対して提言をするという活動をしている横田（2024）等がある。

Dewey（1897）は”I believe that all education proceeds by the participation of the individual in the social consciousness of the race.”（「あらゆる教育は、個人が社会的な意識に参加することによって生じる」（ガーゲン 2009/2020））と述べている。これは、言語教育においてコミュニティに出ていく活動は、ただ単に教育が知識の共有と伝達にとどまらず、社会との対話によって社会的価値や文化などを理解することにつながると捉えることができる。

2.2 日本語学習者の「社会的存在意義」

文化審議会国語分科会は 2021 年に「日本語教育の参照枠」を発表し、日本語学習者を「新たに学んだ言語を用いて社会に参加し、より良い人生を歩もうとする社会的存在」と位置付けた。本学の留学生のほとんどは短期滞在者であるため、実際に社会に参加するということが難しいと考えられるが、正統的周辺参加（レイブ&ウェインガー 1993）の学習論の視点から、言語を学ぶのみならず、本学が所在する枚方市という地域とのつながりを感じつつ、「この枚方というコミュニティの一員として、どう関わっていくのか」という視点でプロジェクトを提示することをイメージした。

またここで付しておきたいことは、このプロジェクトは、留学生と地域住民の方々との交流の機会として用意するものではなく、お互いが共に地域社会の課題を考え、

双方向の対話活動のきっかけとすることを目標としたことである。地域での協力者の意識の変化については、今後別の論考でまとめていく予定であるが、このプロジェクトへの参加が何らかの気づきや意識の変容につながり、留学生の関わりによってコミュニティが変容する可能性もある。

2.3 プロジェクトの共同パートナーと枚方市

このプロジェクトの構想時、偶然にも本学留学生との繋がりをもちたいという市民の方から本学国際交流部に連絡があった。このN氏は、地域イベント、そして市の様々な団体や組織と繋がりを持ち、枚方市の歴史街道枚方宿をベースに精力的に活動している人物で、幸運にも本プロジェクトの共同パートナーとしてご協力くださることとなった。そして、N氏を通して、枚方市に所在する多くの企業や組織、店舗が、本プロジェクトのインタビュー協力者として留学生を受け入れてくださることとなった。

枚方市は、大阪と京都の間に位置する人口約40万人⁽²⁾の都市（枚方市2023）である。江戸時代に東海道五十七次の56番目の宿場町として賑わいを見せ、枚方宿は今でもその当時の風情を感じられる風景が残っている。毎月第2日曜日には「枚方宿くらわんか五六市」というマーケットが開催され、市内外から8000人近い人が訪れる。総合文化芸術センター、枚方パーク等の文化・娯楽施設もあれば、バレーボールチームの大阪ブルテオンズの本拠地としても知られている。淀川河川敷など自然も豊かな地域である。

このような場所で実施となった本プロジェクトの実施概要とその報告を次章で行う。

3. プロジェクトの概要と実践

3.1 履修者、グループ分け、テーマについて

2023年度秋学期から開始した本プロジェクトは、2024年秋学期の時点で3回目を終えた。それぞれの学期の日本語7の履修者数、グループ数、グループの主なテーマは表1の通りである。

表 1

	履修者数	グループ数	グループの主なテーマと活動
23 秋	23 人	5	枚方市にある店舗へのインタビュー後、 海外のオーディエンス向けに店舗の魅力発信
24 春	24 人	6	枚方で活躍している方々にまちの課題と それに対する活動や対策についてインタビュー後、発表
24 秋	18 人	8	興味のあるテーマを留学生が選び、それに関係の あるお仕事や活動をしている方へインタビュー後、発表

履修者の出身国：スウェーデン、フィンランド、ノルウェイ、スペイン、イタリア、ドイツ、トルコ、ラトビア、ウクライナ、ロシア、オーストラリア、ミャンマー、香港、台湾、中国、韓国、カナダ、アメリカ

3.2 成績について

日本語 7 のコース目標は、以下の 1) から 4) であり、特に 4) は、グループワークで本プロジェクトを進めること、そして学外の方とのやりとりが発生するために記した内容である。成績の内訳は表 2 の通りである。2023 年度秋学期および 2024 年度春学期はコース全体の 10% であったが、2024 年度秋学期は、本プロジェクトの学習者への負担と全体における比重を考え、発表と成果物（発表用スライド、スクリプト、ホームページ用記事）の提出に関する成績を新たに 5% 加え、全体の 15% とした。

コース目標

- 1) 上級レベル (JLPT N1/N2 レベル相当) の文型や語彙の意味、使い方を日本語で理解し、日本語で言い換えたり説明したりできる。
- 2) アカデミックな話題や時事問題、身の回りの社会問題に関して、日本語で報告したり、自分の意見や考えを根拠とともに述べるができる。
- 3) 場面や状況に応じて適切な待遇表現を使いながら、自然な流れで会話ができる。
- 4) 日本社会に出て、タスクやプロジェクトのために責任のある行動ができるようになる。

表 2

	全体の成績に対する本プロジェクトの割合	内訳
23 秋 24 春	10%	自己評価 40% 他者評価 20% 教師からの評価 40%
24 秋	15% (発表と記事の提出点 5% を含む)	

3.3 スケジュール

各学期は15週間で、全部で45回（90分×週3回）の授業がある。表3は本プロジェクトワークに関する部分だけを記載した。先述したように、この他に教材をもとにした読解やディスカッション、文法練習などが並行して行われている。

2023年度秋学期から2024年度秋学期にわたってスケジュールを変えていった経緯は次章で述べるが、全体の流れの変更点としては、1) 枚方宿でのオリエンテーションを任意参加へ、2) インタビューを各グループで日程を設け実施、3) 発表のリハーサルの回数を増加、4) スケジュールを全体的に早め、発表を最終週ではなく第13週目に実施したことである。

表3 プロジェクトのスケジュール

	23F	24S	24F
Week 1	概要説明	概要説明	概要説明
Week 2			
Week 3	枚方宿オリエンテーション	枚方宿オリエンテーション (任意参加)	枚方宿オリエンテーション (任意参加)
Week 4			N氏のお話
Week 5		N氏のお話	グループミーティング1
Week 6	N氏のお話	各グループでインタビュー	
Week 7		グループミーティング1	グループミーティング2
Week 8			各グループでインタビュー
Week 9	各グループでインタビュー	グループミーティング2	
Week 10			
Week 11			
Week 12	グループミーティング		グループミーティング3
Week 13			リハーサル①②と発表
Week 14			記事の提出
Week 15	リハーサル①と発表	リハーサル①②と発表	

本プロジェクト開始時から変更を加えていないことは、N氏にゲストスピーカーとして授業で枚方市や枚方宿についてお話しいただいたこと、Unit2「マイカタチャいます、ひらかたです」のユニットで、枚方のおすすめスポットを紹介するという宿題を出していることである。以下、各学期ごとに報告する。

3.4 2023年度秋学期

初めての実施となった2023年秋学期は、枚方市内にある4つの店舗の店主の方々

にインタビューし（30～45 分程度）、それぞれの店舗の魅力と、海外のオーディエンスにどのように発信すればその魅力が届くのかを考え、お店の紹介もあわせてすぐに使えるようなものを英語、または他言語で用意することを課題とした。発表はグループで 10 分とした。成果物としてできたものには、英語または留学生の母語での店舗のポスターやハガキサイズの店舗紹介等があった。SNS 用の動画を作成したグループもあった。

学期終了時に行ったアンケートは、回答数が 23 名中 5 回答と数は少なかったが、他に提出課題としていた学期末エッセイも含めて、以下のようなコメントがあった。

留学生からのコメント（原文ママ）

- I also enjoyed doing something outside of class with the project work. It was nice being able to actually use what we're learning outside of the class. （このプロジェクトワークを通してクラス外で何かすることも楽しんだ。習ったことを実際に使うことができたこともよかった。）⁽³⁾
- もう一つの難し事はプレゼンでした。難しいトピックのプレゼンは時間かかって大変でしたし発表した時あまり自信がなくてです。
- It was also a nice opportunity to connect with the local community, something you otherwise might not get the chance to do amidst your studies. （勉強の合間ではなかなか機会がない地域のコミュニティとつながるいい機会だった。）
- I appreciate that we had a wonderful opportunity to work with ○○. It was a once-in-a-lifetime experience to be so immersed in the Hirakata community. With that opportunity, I was able to have such a fruitful experience in just a language class. （○○と勉強できたことがよかった。枚方のコミュニティに入ることができる一生に一度と言える経験だった。言語のクラスで、有益な経験を得ることができた）
- ... after completing the final Group Project I did recognize the learning outcome, if not so much in language but at least concerning cultural knowledge. It was also a nice opportunity to connect with the local community, something you otherwise might not get the chance to do amidst your studies. （グループプロジェクトを終えた後で、言語的な側面はそれほどでもなかったかもしれないが、文化的な知識に関して学習の成果を実感できた。地元のコミュニティとつながるいい機会だった。）

以上のように、学生からのフィードバックは概ね良好であった。課題は、様々な理由で欠席が多くなっている学生はグループワークへの参加も難しくなってしまうことである。グループワークはやりたくないという意見が当該学期は出なかったが、万が一そういう学生がいた場合には、代替案を用意することも考えることを検討する必要があることがわかった。また、1 回だけのリハーサルでは、教師側からの注意やコメントが反映されているか確認が不十分であったため、発表のリハーサルを 2 回に増やす必要があることもわかった。

3.5 2024 年度春学期

前学期の振り返りをもとに、2024 年度春学期は7つのテーマでグループを編成し、プロジェクトを進めた。当該学期は、枚方で活躍している人々に、枚方にはどのような課題があり、それに対してどのような対策をとっているのか、また、枚方がどのようなまちになったらいいと思うかについてインタビューをし、発表という流れにした。発表までの流れは前学期と同様だったが、リハーサルを 2 回に増やしたことで準備を確実にしていくことができた。

発表後のアンケートからは、自分が住んでいるまちがもっとわかってよかった、自分の日本語能力が上達したと感じているコメントが多く見られた。難しかった点としては、グループで調整しながら準備を進めること、発表すること、面白い発表を準備すること、日本語 7 の他の課題とバランスをとって準備をしていくことなどが挙げられた。また、学期最終週の発表は、時期的に大変だというコメントも見られた。

3.6 2024 年度秋学期

3 学期目を迎えた 2024 年度秋学期は、2024 年度春学期のアンケートの結果から、時期を早めて発表を行うことにした。グループごとのミーティングを増やし、準備を確実に進めていけるようにした。一番大きな違いは、留学生自身がテーマを選定し、研究の進め方も学生が自分たちで決めたことである。またディスカッションポイントを各グループで用意し、発表の最後に提示するよう指示した。時間に余裕があったグループはオーディエンスへ実際に質問し、その場でやり取りを行なった。個人で行ったテーマも含め、8つのプロジェクトで進めることとなった。最後には、それぞれ

の取り組みを記事にまとめた。

アンケートの感想からは、自分が知りたかったテーマについて理解を深めることができた、クラスメートの興味も含めた人となりがわかった、インタビューを通して「自分だけでなく、社会のためにやりたいことをやるという考え方」、自分の意見と他人の意見を擦り合わせていく時の我慢強さや柔軟性も習ったというコメントが見られた。

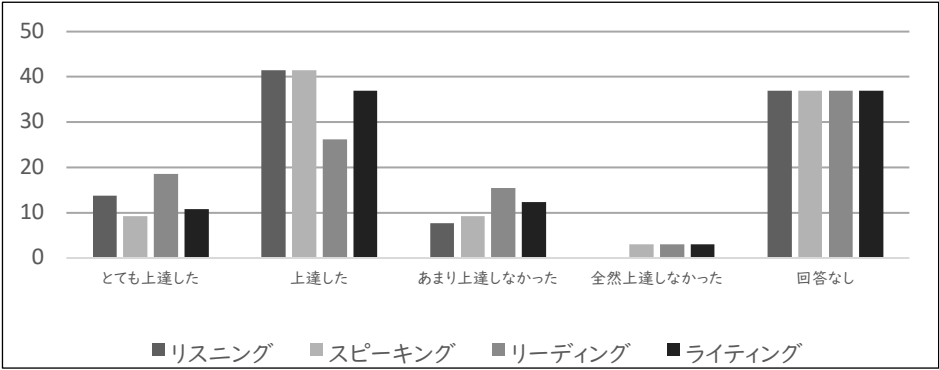
4. アンケート結果

本章は、上記でも言及した学期終了時のアンケートの結果を報告する。3 学期を通しての履修者の延べ人数は 65 名だったが、回答数は 41（63%）であった。以下、本プロジェクトを通して、1) 言語の 4 技能が上達したかどうか、2) 日本に対する理解や考え方に变化があったかどうか、3) 本プロジェクト継続についての留学生の意見の 3 点について報告する。

4.1 言語 4 技能の習得に関する学習者の自己評価

言語能力の習得についての自己評価は、表 4 のような結果となった。

表 4 4 技能は上達したかどうか（自己評価）（2023 年度秋学期～2024 年度秋学期）



	とても上達した	上達した	あまり上達 しなかった	全然上達 しなかった	回答なし
リスニング	13.8% (9)	41.5% (27)	7.7% (5)	0% (0)	36.9%(18)
スピーキング	9.23% (6)	41.5% (27)	9.23% (6)	3.08% (1)	
リーディング	18.5% (12)	26.2% (17)	15.4% (10)	3.08% (1)	
ライティング	10.8% (7)	36.9% (24)	12.3% (8)	3.08%(1)	

3 学期を通して、リスニング、スピーキングともに「とても上達した」「上達した」という回答が半数以上あった。しかしリーディングにおいては、44.7%、ライティングでは 47.7%にとどまった。インタビューや発表が本プロジェクトの大きな軸となる活動であったことからの結果と考えられる。発表テーマに関する資料読解や発表原稿の準備などは、リーディングやライティングに関わる活動と考えていたが、実際の活動量や学習者の視点からの「学び」とはどういうものなのかを今後調べていく必要がある。

4.2 日本に対する理解や考え方の変化

次に、本プロジェクトを通して、日本に対して自分の態度（意見や姿勢）に何か変化があったかどうか質問をした。この問いに対する留学生からの回答では、「変化はなかった」、「変化はあったが非常に大きな変化ではなかった」という報告が見られた。日本に対してもともといい考え方やイメージを持っていた場合は、それが強化されたことを示唆するものや、プロジェクトを通してインタビュー協力者の方の考え方や働き方がわかった、日本についてもっと学びたくなった、理解や考え方の変化ではないが自分なりに発見したことがあった等のコメントが報告された。

4.3 本プロジェクト継続についての留学生の意見

また、本プロジェクトが、学外に出ることが前提となっているため、学習者への負担がどのくらいあるかが懸念事項であった。そのため、活動を振り返って、コースの一部として本プロジェクトを継続し、自分たちの後輩にあたる留学生にもこのプロジェクトを勧めるかどうかを質問した。そのうち無回答が約 37%（回答数 24）あるものの、60%（回答数 39）の学生が「はい」と回答した。「いいえ」と答えたのは約 3%（回答数 2）で、そのうちの一名は入っている部活動のネットワークが本人にとって大きな意味を持ち、特に他のコミュニティを求めていることがわかった。もう一名は、本人のコメントからこのプロジェクトの目的がきちんと通じていなかったことがわかった。

5. 実施後のふりかえり

本章では、本プロジェクトを 3 回実施してみてもの振り返りを、1) 評価の方法、2)

活動の焦点、3) 学習者の自信につながる活動の3点からまとめる。

5.1 評価の方法について

本プロジェクトの評価は、自己評価 40%、他者評価 20%、発表成果物 40%としたが、自己評価は Google Forms で、他者評価は発表時にコメントシートを用いて 4（高評価）～1（低評価）で行った。教師側の評価は最終的な成果物（発表と記事）に対して行ったが、そこに至るまでのやり取りの中でコメントをしたこともあり、教員からの指導がすでに反映されたものに対しての評価となった。

土井（2021）は、日本語教育での PBL の実践でどのような評価が行われているかを調査し、その多くの PBL 実践が「日本語能力の向上に寄与しているかについて有効な効果測定方法があるわけではなく、評価方法に課題があると訴えている論文が複数ある」と報告している。また「ここまでできる」という「診断型」の評価方法のあり方を提示しているが、本プロジェクトの評価方法は課題遂行できたかどうかという点で「診断型」だったと言える。

評価は、学習者の言語能力だけでなく、学習者自身が選んだ課題にどのように取り組んだか、また地域の課題に対してグループで解決策を見つけることができたか、そしてまた自己理解が進み、これからどのように社会とつながっていきたいのか等、態度や姿勢の変化も評価の対象にすることも考えられる。しかし、それは容易ではなく、加えて15週間という限られた期間では、十分にその変化を捉えることは難しい。本プロジェクトにおける評価の観点や手法については、今後さらに探求し、工夫を重ねていきたい。

5.2 どの学習活動に焦点をあてるのか

本プロジェクトの学習項目として考えられるコミュニケーション言語活動は多く、例えば「ビジネスメールを書いて、インタビューのアポイントメントをとる」と言ったようなものも考えられる。しかし、コース時間の制限や、本コースが総合日本語コースであるため話し言葉に重点を置いていることから、インタビュー協力者との事前のやりとりや調整は、N氏とコース担当教員が間に入って行った。学習者がインタビューと発表に焦点を合わせ準備ができるように負担を減らすためでもあったが、本学の日本語プログラムの他コースとも連携を図り、内容を補完し合えるようなカ

リキュラムを考えることも一案としたい。

5.3 自信と自己理解につながる活動

アンケートで、本プロジェクトを始めた時の気持ちを問うたところ、「excited（楽しみ）」という感想より、怖い、心配、緊張という報告の方が多く見られた。しかし、「実際にやってみてどうだったか」という問いには、「楽しかった」、「もっと交流したい」、「engaging（引き込まれた）」、「special」、「great experience」（以上は2024年秋学期の回答）等が見られた。また「日本語でコミュニケーションをする上で、今学期の最初と今で、何か変わったことがありますか」という質問には、41の回答のうち35回答（85%）からもっと自信がある、日本語の何らかの側面が上達したと報告があった。

「越境学習」という概念がある。石山ら（2022）は「ホームとアウェイを往還する（行き来する）ことによる学び」としているが、本プロジェクトも教室（ホーム）とコミュニティ（アウェイ）、母語・母文化（ホーム）と日本語・日本文化（アウェイ）のような幾層にも重なるホームとアウェイを超えて、やりとげたことによる自信に繋がっていたのかもしれない。

6. まとめ

以上、本学日本語7における地域連携プロジェクトの実施について報告をした。手探り状態でこのプロジェクトを始め、最終的にどういうかたちになるのか不安もあったが、インタビューにご協力くださったみなさまが、留学生を寛大な心でうけとめてくださったことに感謝の言葉もない。

また、プロジェクトの共同パートナーとして受け入れ先になってくださったN氏には、こちらの大変無茶な要望や、インタビュー相手のみなさんとの調整なども快く引き受けてくださり、改めて感謝の気持ちを伝えたい。

本プロジェクトをきっかけに、2.3で言及した「五六市」でボランティアをしたり、地区の運動会に参加した留学生もいた。そしてそれに対してこちらがお礼を言われたこともあった。ありがたいことである。筆者自身も、地域のみなさんからさまざまなことを教えていただきながら、留学生と地域のつながり、また「共生社

会」のあり方などを考える機会をいただいた。このプロジェクトはまだ始まったばかりではあるが、今後も留学生と、そして地域とともに歩みを進めていきたい。

謝辞

本プロジェクトの共同パートナーの N 氏、インタビューにご協力くださった枚方市のみなさま、そしてインタビューの際にころよく留学生をサポートして下さったみなさまに心よりお礼を申し上げます。

注

- (1) 「Unit 1：自分のこと、何と呼ぶ？」は、福池秋水氏との共著で作成した。作成の経緯については、福池・倉沢（2024）を参照されたい。
- (2) 枚方市の人口は、2025 年 1 月 1 日現在 392,328 人である。（枚方市 2025）
- (3) 本論文にある学習者のコメントの日本語訳は全て筆者による。翻訳の間違ひは全て筆者に帰するものとする。

参考文献

- 石山恒貴，伊達洋駆（2022）『越境学習入門 組織を強くする冒険人材の育て方』日本能率協会マネジメントセンター
- ケネス・J・ガーゲン（2009） 鮫島輝美，東村知子（訳）（2020）『関係から始まる社会構成主義がひらく人間観』ナカニシヤ書店
- 国際交流基金（2023）『JF 日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』第二版 https://www.jfstandard.jp/f.go.jp/pdf/web_whole.pdf（2025 年 1 月 7 日）
- 土井繭子（2021）「日本語教育における PBL 実践の評価の現状と方向性」『静岡産業大学情報学部研究紀要』（23），1-12.
- 坂野永理，池田庸子，大野裕，品川恭子，渡嘉敷恭子（2020）『初級日本語 げんき』第 3 版 The Japan Times
- 枚方市ホームページ「人口推移・動態・外国人人口」
<https://www.city.hirakata.osaka.jp/0000051452.html>（2025 年 1 月 21 日）
- 高屋敷真人，西郷秀樹，倉沢郁子，向井絵美（2025）（印刷中）「関西外国語大学留学生別科日本語科の統一シラバス作成に基づいた中上級日本語教材の開発」『第 11 回 IRI 国際文化フォーラム予稿集』

福池秋水，倉沢郁子（2024）「日本語上級コースにおける『自分らしい話し方』導入の試み」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』（33），33-54.

文化庁文化審議会国語分科会（2021）『日本語教育の参照枠 報告』

<https://www.nisshinkyo.org/news/pdf/2021/20211013k.pdf>（2025 年 1 月 9 日）

三代純平，米得信一編（2021）『産学連携でつくる多文化共生 カシオとムサビがデザインする日本語教育』くろしお出版

横田隆志（2024）「共生のための社会につながる日本語活動における参加者の意識について」『北陸大学紀要』北陸大学(57), 1-18.

レイヴ ジーン，ウェンガー エティエンヌ（1991），佐伯胖（訳）（1993）『状況に埋め込まれた学習：正統的周辺参加』産業図書

Dewey, J. (1897) *My Pedagogic Creed*. *School Journal* (54) 77-80.

<http://dewey.pragmatism.org/creed.htm>（2025 年 1 月 9 日）

(kurasawa@kansai.ac.jp)